会　　議　　録

会　　議　　名	第６回　第２次小金井市芸術文化振興計画策定委員会		
事　　務　　局	市民部　コミュニティ文化課		
開　催　日　時	令和２年８月３日（月）午後３時 - 午後５時		
開　催　場　所	オンライン会議ツール zoom を使っての開催		
出　席　委　員	大澤寅雄　委員長 伊藤裕夫　副委員長 小林勉　委員 水津由紀　委員 野澤佐知子　委員 福沢政雄　委員 桑谷哲男　委員 小林真理　委員 戸舘正史　委員 西村徳行　委員		
欠　席　委　員	山村仁志　委員		
事　務　局　員	１　事務局運営補助　特定非営利活動法人ＳＴスポット横浜 小川智紀、田中真実、荒田詩乃 ２　小金井市 コミュニティ文化課長　鈴木遵矢 コミュニティ文化課専任主査　吉川まほろ コミュニティ文化課主任　津端友佳理 コミュニティ文化課主事　小野智広 ３　事業実施者　特定非営利活動法人アートフル・アクション 宮下美穂		
傍聴の可否	可		
傍聴不可・一部不可の場合は、その理由	可	傍聴者数	０人
会　議　次　第	１．計画の構造について ー骨子案をもとに計画の構造について議論を行う ２．その他 今後の進め方について 意見交換等		
会　議　結　果	別紙のとおり		
会　議　要　旨	別紙のとおり		
提　出　資　料	配布資料		

（開会）

１．計画の構造について
　　－骨子案をもとに計画の構造について議論を行う

【大澤委員長】こんにちは。おつかれさまです。お忙しいところお集まりいただいてありがとうございます。わたくし今ベルリンにおります。家族が 2 年前からベルリンで生活しており、コロナの影響で渡航を禁止しているんですが、家族が長期滞在の資格を持っていたら入国していいということになり、昨日から入りました。こちらは朝の 8 時です。時差を超えて会議ができることにすごい時代になったなと思いますが、引っ越したばかりの場所で Wi-Fi の環境が不安定で、音声が途切れたら入りなおしますので、進行にご協力いただければと思います。今日と明日連続 2 日間で委員会を設定させていただきました。今日は計画の構造について骨子案を元に話し合います。明日の次第についても先にお伝えしますと、各項目について内容を精査するということになっています。時間が空くと内容を忘れてしまって、思い出すのに時間がかかってしまうので、連続にしました。構造についてイメージを共有した後で、明日中身について揉んでいくということにできたらと思います。

前回議論したことを思い出していただきたいんですが、他の自治体の基本計画の構造を見て、それに較べると小金井市の現行の計画は、骨組みとしてはきれいな骨組みになっていない、という話をしたと思うんですね。他の自治体は、上位概念から細かくなると縦にきれいに分かれていく構造だったんですけど、小金井市は必ずしもそうなっていなかった。とっ散らかったようにみえるかもしれないけど、熟慮されてそうなったのも分かる気がしました。途中で小林真理委員が退室されたので、そのあたりを補足してコメントをいただいてもいいですか？

【小林真理委員】計画を作るときに、その自治体がどこまでやれるのか、ということまで考えてやらないといけないと思うんですね。どこも同じように作るのは簡単なんだけど、自治体側がそれに沿ってやるだけの許容量がある場合と無い場合があると思っていて、それは能力の問題とはまた違うところもあるんですね。財政力とか人員の問題もあります。たくさんの事業をこなしていて、計画の推進にどれだけエネルギーが割けるかは自治体によって異なるわけです。現行の計画を作っていた時は、行政は現実的・具体的な事業を展開する余力があるようには決して見えなかった。現実に事業を回していくということを書かないと何もしないまま時が過ぎるだろうということを想定していました。最初に、作るときに相当に細かく書きこんでいこうと、それで評価するときにここまでができているけれどここまでができていないということがより具体的に話ができるようにしたかったということです。他の計画からすると、アクションプランまで書きすぎていて、ここまでやってくださいということを書いてしまっているんです。現行の計画策定時は施設も無かったし、ホールも無かったし、美術館も入れられなかった。そうすると、実行委員会を立ち上げて、ＮＰＯ化するところまでスケジューリングすることになりました。行政を信用することが、できなかったんです。行政は人が変わるので、どう計画の遂行を担保するのかが難しく、書く

しかないって思ったのがぐちゃぐちゃしている理由です。

【大澤委員長】宮下さんは計画を作る時の委員で、そのまま担い手になったんですが、計画を作る時には自分が推進していくってことをイメージしていなかったと思うんです。書かれた絵を見て自分がそこに関わっていくという経緯も含めて、当事者になって行なったことを聞いてみたいです。

【オブザーバー・宮下】最初の３年間は実行委員会を作って、その事務局を当時東京大学にいた佐藤李青さんがやっていました。佐藤さんは計画策定のプロセスについては熟知されていたので、できるだけニュートラルに多くの人に声をかけようとして、市民に対する働きかけもされていた。３年間やろうとしていた２年目にアーツカウンシル東京から共催にしないか、というお話がありました。法人格が無いとだめだったので、ＮＰＯ法人になったんだと思います。計画の中で、３年間はスタートアップみたいな時期で協働でやりましょう、その間に担える組織をつくりましょう、という形で３年刻みで計画されていたんですが、図らずも３年目のときに外圧としてアーツカウンシル東京から共催の誘いがあり、超特急でＮＰＯ法人を立ち上げました。ＮＰＯ法人になるときに今まで事務局をやっておられた佐藤さんが、今度はアーツカウンシル東京に移られて、名実ともに右も左もわからない市民がやらなきゃいけない状況になったということですね。私は最初のアーツカウンシル東京事業の共催はこんなにやるつもりはなくて旗振り役のつもりだったんですが、学校連携や市民の人たちとやる中で細かなことがでてきて、当時の大勢だと難しいなってことで、他で働いていたたんですけど辞めて事務局になった感じです。私がここにいる経緯はそんな感じです。

【大澤委員長】この計画の中に書いてあったことが形になっている感じはあるんですか。アクションプランに近いところの書き込みがあったから、まったく同じではなくても目指すところはこっちだっていうのが確信を持って見えている気がするんですが。

【オブザーバー・宮下】計画には、「芸術文化の振興で人とまちを豊かに」ということが書いてあるんですが、それに至る道はひとつじゃないよ、ということが書いてあることによって、さまざまな方法で目的に到達すればいいということが読めると思うんです。もう一つは、ふつうは行政の計画は目標に至るまでの体系図があって、階層や項目がはっきりしているゆるぎない、逃げ場がない構造になっているものが多いと思うんですが、体系図が比較的揺れ幅があって、読み替えをすることが許されたように感じます。縛りがあるって読めば縛りがあったのかもしれないですが。私はあんまり気にしないでやったってことかな。

【小林真理委員】こういう宮下さんだから信頼してお願いできたってことです。ＮＰＯ法人になるまでいろいろあった。問題意識を共有できて、動かして一緒にできる人というのが、だんだんそれまでの活動で見えてきました。宮下さんはもともと環境ＮＰＯで活動されてきたんですね。ＮＰＯでの活動の仕方もわかっていたし、市内のネットワークもそれなりに持っている人だというのが信頼になり、宮下さんにお願いし

ようという雰囲気を構築してったっていうのはありますね。

【大澤委員長】計画づくりの段階で、参加していただいている委員のみなさんって、自分がやっていくという自覚を最初から持って委員をやっているわけじゃないと思うんです。徐々に外堀を埋めていくように担っていただいたわけですが、それってラッキーなことですし、往々にして委員としていいたいことをいって計画の策定が終わったら当事者じゃなくなる場合が多いですが、そうじゃない関わり方を次期の計画にあたっても、みなさんの力が大事になるので、自分自身の関わりもイメージしながらお話をしていただけたらと思います。事務局に、説明をお願いします。ひとつは、現行の計画と現在の会議の中で出た意見が資料でまとめられていますが、語られている項目、語られていない項目を説明して頂いても良いですか。

【事務局・小川】現行の計画で見てみます。上から順番に見ていきますと、はじめに、は書かないといけないですけど、芸術文化の捉え方は話として出てきていますね。小金井市の現状、はそれぞれの議論の中に吸収されていますので、そこはひとかたまりにはなっていないというところです。重点的に取り組む施策として近いのは、担い手の話、ボランティアの話、行政の役割、協働は出てきています。事業の展開で、現行の計画では市民とアーティストが協働するとか、市民をつなぐ機会や市民参加のきっかけは、少々議論が進んでいないところではあります。それで下を見てみると、推進委員会とか実施主体とか研究機関の連携の部分は、評価をしないといけないという議論はしたと思いますが、整理はしていないと思います。

【大澤委員長】ありがとうございます。私が確認したかったのは、昨年度やってきた委員会の中で語ったことを整理して、あれだけ雑多な意見の中で集約して現行の計画の筋立てでまとめてみると、最初のはじめにというところと、推進体制というか、どう進めればいいかの議論はできていなかったってことが今の段階で共有できるといいかなと思います。真ん中のところに関しては、現行の計画としては筋立てになっていたのを、会議で出た意見をあわせてみたらこうなったけれど、私の印象としてはこの整理の仕方をしっくりきていないんじゃないかなってことがあって、ここから骨組みを立ててあらためて立てていきましょうって話になります。よくわからなかったとか、もう少しこういう説明が必要じゃないか、またご意見があればご意見をお願いします。

【戸舘委員】小林真理委員がおっしゃったように、手取り足取りこうやってやるというのをある程度明文化していた計画で、それを上手に読み込める人、行間を読み込んで、具体化できる人材がいたからできたってことですよね。なんでできたのかなと考えると、宮下さんが、目標の曖昧さをおっしゃったと思うんですね。そこよりも、事業を３つに現計画で分けているんですよね。学校となんかしなさいとか、とっかかりがあったからこそ、取り組めたと思うんですね。今回の計画でも、そういうとっかかりの言葉、既存の方法論とか枠組みみたいなこと、誰もが共有できる言葉はちゃんと入っているといいかなと思いますね。とりわけ次期の計画は、アートフル・アクション以外の方にも関わっていただけたらと思うので、そういう人たちと共有できるフッ

クを入れるように心がけたらと思いました。

【水津委員】アートフル・アクションを隣で見たりしながら、子どもの文化の活動をやっている中で思うのは、文化が特別なものみたいな認識が一般にはまだあるということ。興味のある人だけが興味がある、みたいなイメージなんですよね。ハードルの高いものに思えちゃうんです。市民の生活の中にいろんなものが文化だよってことが分かったり、そう思えるものを入れ込めたらいいのかなって思っていて。子どもの活動をしながら、文化の条例があっても、私のやりたい乳幼児の活動ができていないところもあり、まだまだ手の届かないことがたくさんあります。そういった部分も統括されているものが市民目線としてあるものが欲しいなって気がしています。これからアクションをしていくのは市民だと思うので、アートフル・アクションなのか分からないけど、コーディネーター的な役割を担う人がいる重要性を書いてもらって、市民の方でいろいろ趣味でやっているものをつなげると豊かなことができるので、来てもらうだけじゃないものが今後の計画の展開として考えられると良いかなと思います。

【大澤委員】ありがとうございます。いま、水津さんがいっていただいたのもフックになる言葉が含まれているなって思いました。生活に近いところの文化だとか、コーディネーター・つなぎ手の役割とか、語られているけれど十分には届いていない言葉かもしれないって思いますし、今までの議論の中でも多かったフックの部分かなと思いました。他にいかがですかね。例えば、文化芸術は高いところにあるように感じる市民の方もいると思うんですが、高みの文化芸術も大事なんだっていうご意見もあると思うんですね。そういったところ、どう市民のみなさんに共感してもらえるかということもあると思うんですが、そのあたり、小林勉さんいかがですか。

【小林勉委員】武蔵小金井の駅前にあるホールはかなり良い立地のホールだと思います。あそこが何かしら稼働している状態なのは良い状況じゃないかなと思います。テレビ番組で小金井市のことが出ていて、ランク付けされていました。１位は大きな公園で、あとははけの森とか、市民のお宅を開放しているとか。そういうのが文化だなって思っていまして、外から見たら、文化や自然の場所が特色なのかもしれません。僕らみたいな音楽を専門にやっている人がホールでしっかりやるのもありだと思いますし、すでに根付いているものを外に発信できたら良いと思います。

【大澤委員長】演劇を専門とした劇場が都内にある中で、この多摩地域で、何を届ければいいか、桑谷さんなりのお考えをお聞かせください。

【桑谷委員】昔からいわれていることは、市民は芸術文化に対して無関心であるということです。高円寺ではじめた頃は、どれだけ興味を持ってくれるかということを考えなければならなかった。関心は放っておかれた気がします。それで思うことは、アートコミュニティ以外の人を引き付けられないっていうのが最大の悩みで、そのためにはどうしたらいいのか、ということです。今までの状況だと関心のある人が観客として支援者としてスタッフとして入ってくることだったんですが、０歳児の段階から幼児教育といっていいんだと思いますが、限界芸術、お母さんの背中で、０歳児のこ

どもが鼻歌やこもりうたや絵本の読み聞かせをしてもらいながら育っていくその過程が充実していないと、遅いんじゃないかなというのが持論です。小さい時から自然に、限界芸術に対して興味を持ってもらえれば、大衆芸術、テレビアニメ映画から入っていくだろうし、若手のロックのコンサートのようなアーティストに興味を持っていく。その次に段階としては、純粋芸術の世界に流れていく気がするんですね。そういうふうに入っていかないと、敷居が高い、近寄りがたいって話になると思うんです。そういうふうにここ 10 年 20 年かけていかないと、興味を持たないという関心のなさについては太刀打ちできないんじゃないかなという話です。高円寺がやったのは、興味を持たなくていいから応援をしてくださいということをやりました。地域と市民と座・高円寺が協働で支え合う環境づくりをしていて、それは成功したんじゃないかなという気がします。大きな問題は芸術文化についての予算の評価の仕方ですね。10 万 20 万 30 万の都市で、大都市中都市小都市で同じような文化芸術を求められても、かなわないと思うんですね。予算が無いものとあるものでは変わって当然じゃないかなと思うんですが、市民も行政も同じものを求めてしまう、それは間違いじゃないかと思います。最後に、先ほどいった、予算がどう決められているかというところです。どこの市でも芸術文化の予算は概算として出していないんじゃないかなと思います。芸術文化についての予算はこの予算で、小金井の計画はこういう予算でやっていくんだってことを保障されないと力尽きてしまう。スタッフの想いも情熱もつまってしまう。これから芸術文化も現場も知らない、知識も知らない人が運営していくと思うので、その辺の欠点もあると思います。

【大澤委員長】お二人も音楽や演劇というある意味狭い分野の文化芸術を、小金井から発信したり、乳幼児からアプローチして限界芸術、かなり広い文化と芸術の接点を作り出していこうというご意見だったと思うんですね。今までのような、文化芸術は素晴らしいものだから、良いものをみなさんに届ければ愛好者も増えていくだろうというよりかは、いかにして親しみを持ったり、市民自らの楽しんでもらえるかのご意見も多いなと思います。文化芸術と違うところから、西村先生に学校教育、生涯学習、これまで議論したところですが、次の基本計画で何を重点的に打ち出していけるかを聞いてみたいなと思います。

【西村委員】学校もどちらかというと非常に固い組織として、外の方が関わるときに大きな壁があるような、非常に硬い組織だなと思います。学校の中の教育をどう開いていくかが課題になっていて、学校でよい市民を育てることを、学校の中だけではなく、社会と同じ問題意識を持って、課題を共有していこうというのが大きな課題になっています。やはり、それが４月から始まったということになっています。例えば、美術の授業もそうですけど、学校の中では教室言葉と廊下言葉という話があります。教室の中では背筋を伸ばしてちゃんとしゃべりますけれど、廊下ではなんでもかんでもいいますし、間違っていることでも何でも話す。美術の観賞は、教室言葉じゃなく廊下言葉で話をする授業にしていこう、正しいものを知っている人から知らない人に伝えるんじゃなくあるものを共に語ろうという課題になっています。美術作品は今まで、先生が知っていることを語ってきました。そうすると、子どもたちの目が死んでいく。教師はあくまで指揮者であって、子どもたちの言葉が引き出されるような場所

を作って行くものだと思っています。生活の中の造形という言葉があったんですが、まちの中のもの、美術作品のなかのもの、先ほど限界芸術というお話がありましたが、美術作品を生活の中のものとして考えようということが始まっています。学校の先生の話をしている隣に、いろいろな地域の人がいることで、そういった取り組みがより充実したものになっていくと思います。コロナ禍で非常に難しくなっていく状況ではありますが、私自身はそう思っています。

【福沢委員】文化協会をやっていまして、会員は 40 名くらいです。美術展部門と、大ホールを使うオーケストラや歌のグループなどさまざまなのですが、実はいろんな問題を抱えているんです。どういうふうにしていけば関心を持ってもらえるかが大きな問題です。これっていう道がなく、地道にやるしかないのかなという気がします。会員の年齢層でいうと仕事を終えた高齢者が多く、文化活動をする上で、実際に行動をする人がなかなかいない悩みがあります。戻ってしまうかもしれないですが、先ほどの現行の計画の中の、2 番目の小金井市の現状として小金井市の特性と課題がありました。小金井の特性をよくとらえて、現状認識をして、新しいのをつくることが必要かと思います。先ほど、小林勉委員がお話しされていたテレビ番組が先週の土曜日にあって、小金井の特性がよく出ていました。小金井公園や武蔵野公園、野川など、自然環境の優れたところがあると思いました。でも、東小金井の駅を降りて、公園に行くという時に、案内の地図や案内板が無く、芸術とか文化の案内板を作るのもいい気がしました。せっかく小金井にもスタジオジブリのスタジオがありますので、そういった関係者に協力してもらい、芸術とか文化の面でも小金井に来て楽しくなるような、住んでいる人が豊かさを感じることができるんじゃないかなって気がします。そうじゃなくて、芸術文化、教育だとか、環境、自然と融合して活用する分野もあり、利用できるような看板とか案内とか、楽しめるまちにしたいって感じがあります。

【大澤委員長】地域資源をしっかり活かして発信する、地域の資源をいかに文化的に魅力ある情報として発信するのが大事なんだろうなって思いました。野澤さん、文化芸術に関心があるわけじゃない人からして、市が文化芸術の振興をするときになにが足りないんですかね。市民目線から見てお考えになることはありますか。

【野澤委員】告知が少ないと思います。知る機会がすごく少なくて、参加したい方はいると思うんですが、どういう形がいいのかわからないですけど、ターゲットにあったものを身近で知り、発信する力があったらいいのかなっていう気がしています。参加したいなと思っても、どこでやっているかわからない方は多いんじゃないでしょうか。みんなに公表するとか知らしめる機会がもっとあったら、参加しやすくなるし、ハードルが下がる気がします。

【大澤委員】繰り返しいわれてきたことだと思いますが改めてその問題は大きいなって気がしています。伊藤先生、委員のみなさんのお話を聞かれてきて、小金井市の文化芸術基本計画は何を重点的に打ち出すか、伊藤先生のお話をお聞かせください。

【伊藤委員】Ａ案とＢ案って二つのプランが出ていますが、Ｂ案に興味を持っていま

す。オーソドックスじゃないので作り方によってさっぱりわけがわからないものになるなって気がしています。現行の計画に対する違い、みなさんのお話しに対するコメントをみて考えました。新たな文化施設が入ること、駅前の文化施設のようにきちんとした文化施設ができました。他の自治体の計画は、既存の文化施設の活用と文化協会に対する記述がほとんどということが状態です。それに対して小金井市の新しい計画においては、これまでは文化施設がなかったので文化施設の位置づけをどう考えていくかがポイントです。A案、B案にも学芸員が挙げられている。そういった人たちと市民がどう付き合っていくか。文化施設ができると、コンサートであったり、演劇であったり、それなりのものをやっていくと、市民がだんだん受動的になっていくって事に問題があると思います。小金井市の現行の 10 年間の大きなポイントは市民が能動的になったということ。新しい文化施設の役割の中で、市民と専門家をつないでいく機能を明確化していく必要がある。みなさんが出されているように小金井の持っている文化資源、地域資源が、幅広い形で文化施設に集約されない形でやっていくことが大事だと思います。施設ができるとどうしてもコンサートは文化施設中心になっていく。本当は、コンサートを駅前の広場でやってもいいわけです。文化施設の専門家がホールに閉じこもらずまちに出ていく。文化施設の人たちを利用して、現在の活動を強化していくことが必要と思っています。事務局から案が二つ出ていますがB案の方が面白いのかなって気がします。1 次元 2 次元 3 次元はまだよくわからないです。伝えていく、深めていく、文化資源を柱にして、公共性はわからないんですが、文化資源と市民自治として、市民自治は留意事項になりがちなのを前に出していくのは結構興味持ちました。

（休憩）

２．その他

今後の進め方について

意見交換等

【大澤委員長】後半は、事務局に整理していただいたA案・B案どちらで進めようか話すことになります。

【事務局・小川】A案は、オーソドックスなパターンで付箋で貼りなおした時に即興で大澤さんがつくってくれた流れになります。計画の基本ということで、文化芸術の範囲、公共性、行政の役割、そして協働、担い手、受発信、評価のことが書かれています。既存の文化施設の利活用というところが次の大きなブロックになっています。施設の特色、はけの森美術館を置いてアクセスの話、交流の話、パブリックスペース、プログラムの特徴、広報、評価、組織体制、学芸員と続きます。次に、文化芸術以外の分野との連携、学校との連携、市民協働、自治体連携、ＮＰＯのことを通して、全体を見ていこうというA案でした。
B案は、どんな骨子がいいのかを話していた時に、計画は印刷して冊子にすることを前提としているから順番ができてしまう。そうではなく、３次元、立体的な広がりがあるものを考えようと思いました。B案は、文化芸術のいまここ性、いまここにある

小金井の文化芸術とはなにかってことを１章で語れないか、文化芸術の範囲の話、文化資源の話、市民協働、社会教育、学校教育をなんとか一体的に扱う、社会包摂・社会的排除生きづらさ、見過ごされているものを文化芸術の定義の中で話ができないか。パブリックスペースと施設の特色が見えてくると思います。2 次元ですが、点となっている文化芸術、芸術文化を伝えていく、広めていく、深めていく、これを点ではなく線、矢印にしていくのはどうしたらいいか。これまでで一番使えそうかなって思うのは、市民自治は理念として使われて終わりですが、市民自治を道具っぽく示せないだろうかと。市民意識の問題、担い手の問題、学芸員の問題をキーにして市民自治を考えられないか。担い手の話としては、ＮＰＯとの協働、ボランティア、学芸員、専門家、組織体系プログラムの特徴、専門性の下にぶらさげられる問題じゃないかと思いました。一番苦労したのは面的変化、時間的変化、持続に向けて、ですが、面的変化になると３次元の話ですし、10 年後、時間的変化も射程に収めないといけないなって、４次元なんですかね、次元を超える話を考えると、公共性、活用方法、自治体連携、行政の役割も、評価のやり方も、今考えているんじゃないやり方を考えなければいけないなってことをお話ししておきます。

【大澤委員長】お手元に資料が届き、Ａ案とＢ案はどうだったか、率直な印象をお聞かせいただけないでしょうか。

【野澤委員】最初わからなかったんですが、説明を受けて、すごくＢ案の方が、そういうことなんだって納得しました。１次元、２次元、３次元にひっぱられるとなんだろうなって感じがあるんですけど、説明していただいてすごくわかりました。

【福沢委員】従来のオーソドックスのパターンからするとだいぶ違ってよく理解していないんですが、なんとなく新しい計画にするとＢ案がいいのかなって、思っています。

【西村委員】最初いただいたときはわからなかったんですが、お話を聞いて、ピラミッド型ではなく、有機的というか、固まりではなく流動的というか、いろんな価値観をつないで、有機的なつながりがあって、動いているのが、頭のなかにイメージされて楽しいというかそれが楽しみだなって思っています。

【桑谷委員】時間差あるいは、広がりのことなんだろうかなって見ていたんですが、すぐできるもの、これからやるもの、長い時間をかけてやるものって考えると余裕もあるし、ゆっくり計画もたてられるってこともありますし、私としても面白く、楽しくできそうだなって、思います。こういう発想はできなかったです。以上です。

【小林勉委員】えっと、ＡとＢ全部よませていただいて、Ｂ案の３次元パターンは時間的変化が 10 年間の課題なんだなって思ったところです。自分のことを思うと、自分が行った大学の声楽科にひさしぶり行ったら４分の１の 20 人しかいなかったんです。担い手だとか、そういう問題が出てくるんだなって、Ｂ案の３次元パターンとかに担い手とか学芸員とか、これをみてそう思いました。

【水津委員】正直どっちがいいっていわれると、よくわからなくて、人が見てわからないと、ダメで、そこの工夫は必要なのかなという点がひとつ。Ｂ案は広がりをかんじるので、いいと思います。３次元の中の持続性とか、10 年後とかに大事なことがあって、いろんなものが分断されるなかで人として生きるために、文化が体験として必要なことなので、震災の時とかもあって、そのことが３次元の意味合いに持たせるというのは大事だと思います。コロナ禍だけじゃなくて、災害とか天災であるとか、いろいろなことが起きた時に文化は大事なものなんだなということを入れていきたいなと思います。あと、他の条例と比べた時に、また文化的の人が考えると異次元なんて思われるなってことも若干懸念はありつつも、どうでしょうってところです。

【戸舘委員】Ａ案なんですけど、既存の文化施設の活用があったりして、とても具体的で使いやすいけれど、それゆえに縦割り型の役割分担を誘導するつくりになっている気がしていて、それは皆さんとの議論の精神と反することにならないかなと思いました。Ｂ案は直感的にいいなと思いました。水津さんのおっしゃるように使い勝手が悪いとだめだなと思うんですが、それはむしろ肯定的にとらえたいなと思っています。つまり創意工夫をしないと使えないつくりになっている気がするんですね。その余白を残すのは大事な気がするんです。有機的に回って行かないって言うのは大事。市民自治を理念ではなく道具として使うのは僕も賛成です。それを活かすためには、どちらかというとＢ案の方が盛り込みやすい気がしました。

【小林真理委員】Ｂ案非常に面白いんですけど、わかんないですね。例えば図と１次元、２次元、３次元、をもうちょっと明確に言葉にできたら伝わっていくと思うんですよね。ちょっと抽象的なので、それを落とし込むことができたらと思いました。これをどう活用するかと考えていくと、小金井で文化芸術とか、文化行政だとかを担う人たちが憲法のように確認する作業ではあるんじゃないですか。あまりに解釈の度合いが強すぎると、できなくなっちゃう部分もある気がして、どの部分に解釈の余地を残すか、も大事な気がするんです。創意工夫して、いま考えることを超えるようなことをやる部分が、上手に混在するかは大事です。市民自治を理念ではなく、道具として使えたらいいんじゃないかっていうのは、大賛成です。文化行政に市民自治をということで頑張ってみたんですが、具体的な活動とか行政の連携での枠組みづくりでの実効性あるワードとして使えないんです。うまくやると、今までのやりかたみたいなものを継承しつつ、新たな一歩に踏み出せるんじゃないかなってことを考えました。

【事務局・鈴木課長】行政の立場からすると、説明できるのかなって若干不安を感じています。その解釈の余地があったり、位置づけがあるのであれば、Ｂ案でも大丈夫かな、って思います。役所的な考え方になりますが、進行管理・評価をどうやっていけばいいのかなという気がしています。

【大澤委員】一通り印象を聞いて、もっと拮抗すると思っていました。どっちがいいかと聞かれた時に、Ｂ案さっぱりわからないといわれると思っていたんですが、いろんな期待の声も聴いて、ここまで事務局と一緒にブレインストーミングができて良か

ったんじゃないかと思っています。改めて見直した時に、この基本計画が誰を主語に描かれるかというと小金井市の基本計画であるから、小金井市が大きな主語です。B案をあらためて見た時に、それぞれの主語が「いまここ」っていう点から始まって、面になるひろがり方をしたときに、それぞれの主語の当事者性から離れずに、ここまでは自分だけどここからは誰か、と広がっていくことができそうだなって感じがしたんです。A案は、縦割りが生まれ進行管理もしやすくなる、他人事が増えちゃう気がします。それが、B案だと自分の視点からどう広がって行けばいいんだろう。どうやって 10 年先を見て行けばいいんだろうってことをつながりを持って語れると良いんじゃないかなという気がしました。戸舘委員や小林真理委員のあたりからおっしゃっていただいたように、使ってもらわないといけない計画なので、僕としては、B案がこのメンバーのなかでは議論してきたことを具体的に固めていくのに語りやすい構造になっていると思ったら、この構造を基本に中身を詰めていって、本当にこの構造のままでいいのかってことを確認して、市では使えない事になるんだったら、構造を組み替えが必要になると思うんですが、具体化していく作業はB案のままで進めてみてはどうかなと思っています。

【オブザーバー・宮下】私は４次元でも良いのかなって思っています。そこに時間というファクターが入ると、今鈴木さんが説明が難しいというお話されていたことを実現していくのも、先の見通しが無いから動かしにくいのかなと思います。時間的なファクターをいれる。それから、なんでB案なのかってことと、社会包摂みたいなことはすべてにかかってくると思うんです。そういうふうに縦割りではすまない問題が出ていく中で、社会包摂みたいな問題は問われないといけないし位置づけなおさないといけない。それによって問われることは大事な気がするなと思いました。

【西村委員】明日は欠席させていただきます。伊藤委員がお話しされていた、能動的な市民という話ですが、そこと連動することではじめてB案は成り立っている、つながっているのだと思いました。その土壌があるからこそ、B案がなるほどなって思いました。いわれていますように文化や美術を語る人たちだからこういうことになったんだねってことではなく、言葉を砕いて、それこそ教室言葉ではなく廊下言葉で、生活していくことにつないでいく、決して特別ではないそれがひとつの課題なのかなって、思っています。

【大澤委員長】ありがとうございます。明日中身をアイデアを整理しなおしながら、付箋を構造に入れ込んでいこうという思惑なんです。B案の方向性で作業をすすめていけそうですね。立ち止まって考えようとか気を付けた方が良いんじゃないかなということがあればご意見いただきたいと思います。

【戸舘委員】B案の方が、話してて楽しそうじゃないですか。B案の方が面白い。

【大澤委員長】B案で議論を４次元の時間軸で、それぞれの主語が小金井全体の文化芸術に繋がると良いんじゃないかなと思います。こんな流れで明日次を進みましょう。事務局に戻します。

【事務局・小川】意見交換等、今後の進め方、ありがとうございます。明日も同じアドレスで同じ時間にお付き合いいただければと思います。さらにその先は明日話ししましょうかね。明日元気にお会いできることを楽しみですね。

【事務局・吉川】委員の欠員募集で４名の方が手を挙げてくださっています。これから選定します。

――　了　――